

# Profile

作曲・脚本・音楽監督

**三輪眞弘**

Miwa Masahiro



1958年東京生まれ。1974年都立国立高校入学以来友人と共に結成したロックバンドで音楽活動を始める。1978年渡独、国立ベルリン芸術大学で作曲をイサン・ユンに師事。1985年より国立ロベルト・シューマン音楽大学でギュンター・ベッカーに師事する。佐近田展康と共に「フォルマント兄弟」としての創作・思索・講演活動や、CDアルバム「村松ギヤ(春の祭典)」(2012)リリースなどその活動は多岐にわたる。著書に『コンピュータ・エイジの音楽理論』(1995)、さらに『三輪眞弘音楽藝術-全思考1998-2010』により2010年度第61回芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。現在、情報科学芸術大学院大学[IAMAS]教授。旧「方法主義」同人。  
<http://www.iamas.ac.jp/~mmiwa/>

演出・映像

**前田眞二郎**

Maeda Shinjiro



1969年大阪生まれ。映像作家。情報科学芸術大学院大学[IAMAS]教授。映像メディアを「未知を発見する道具」と捉え、実験映画、ドキュメンタリー、メディアアートなどの分野を横断し、イメージフォーラム・フェスティバル、山形国際ドキュメンタリー映画祭、恵比寿映像祭などで映像作品を発表。舞台や美術などの他領域アーティストとのコラボレーション、上映会の企画なども少なくない。映像レーベルSOL CHORDを監修。WEBムービー・プロジェクト“BETWEEN YESTERDAY & TOMORROW”が第16回文化庁メディア芸術祭・アート部門優秀賞を受賞。  
<http://maedashinjiro.jp/>

14歳の少年信者

**さかいいいしう**

Sakai Reisiu



石川県生まれ。武蔵野音楽大学にて声楽を佐伯真弥子氏に、IAMASにてアルゴリズムックコンポジションを三輪眞弘氏に師事。詩人の松井茂と詩と声のユニット「PreAva」を結成(2006)。声をテーマに活動し、これまでに幸村真佐男、銅金裕司、吉野裕司、真鍋大度、シマカワコウヂ、トリ音、ロイヤルハンチングスほかさまざまなアーティストとコラボレーションを行ってきた。金沢大学能登里山里海マスター育成プログラムを修了し(2014)。里山で子どもと大人が楽しめる演奏会やアートイベントを企画している。「2016年3月能登、さかいいいしう。」(限定49枚)をリリース。  
<http://reisiu.sakura.ne.jp/wordpress/>

儀式を司る4人の巫女(キーボード)

**岩野ちあき**

Chiaki Iwano

大阪府生まれ。神戸大学発達科学部人間表現学科卒業。在学中、ドイツ・ハンブルク大学へ留学すると共にInternational College of Music Hamburgピアノ科Senior study program修了。第18回ショパン国際ピアノコンクールin Asiaにてアジア大会アマチュアソロA部門銅賞。現在は演奏だけでなく、教育やアートマネジメント等、多方面から音楽と社会との関わりについて研究している。神戸大学大学院国際文化学術文化論コース博士課程前期課程在学中。大阪大学『記憶の劇場』受講生。

儀式を司る4人の巫女(キーボード)

**木下 瑞**

Mizuho Kinoshita

奈良県育ち、京都市在住。関西学院大学法学部法律学科卒業。やまと郡山城ホール(奈良県)、京都コンサートホール等においてクラシックコンサートの企画制作業務に携わる。大阪大学文学研究科「芸術計画論演習」を通じて三輪眞弘作品に出会い、2016年12月、伊東信宏 企画・構成 レクチャーコンサート「声のような音/音のような声 三輪眞弘作品集」(ザ・フェニックスホール)において「言葉の影、またはアレルヤ」に巫女の1人としてキーボードを演奏。

儀式を司る4人の巫女(キーボード)

**日笠 弓**

Yumi Higasa

大阪教育大学教育学部小学校課程音楽専攻卒業。一般企業やメーカー系音楽教室講師を経て、現在は兵庫県三田市にてピアノ教室を主宰。三菱電機奏楽合唱団伴奏ピアニスト。これまで、ピアノソロやデュオ、鍵盤ハーモニカ・バンドなどでコンサートに出演。大阪大学「アートマネジメント人材育成プログラム」「芸術計画論演習」を受講、三輪眞弘作品に出会う。おおがきピエンナーレ2015「みんなが好きな給食のおまんじゅう」に出演。

儀式を司る4人の巫女(キーボード)

**盛岡佳子**

Yoshiko Morioka

大阪府出身。兵庫県宝塚市に在住。大阪樟蔭女子大学児童学科卒業。西大寺幼稚園に教諭として勤務。後、ヤマハのピアノ、エレクトーン指導グレードを取得。現在、レセプションリストグループに所属し、音楽ホールでのイベントに従事している。2016年12月、伊東信宏 企画・構成 レクチャーコンサート「声のような音/音のような声 三輪眞弘作品集」(ザ・フェニックスホール)において「言葉の影、またはアレルヤ」に巫女の1人としてキーボードを演奏。大阪大学『記憶の劇場』受講生。

信者1(映像オペレーター)

**古舘 健**

Ken Furudate

1981年神奈川生まれ、京都在住。コンピュータ・プログラミング、メカトロニクスなどを用いて、インストール、ライブパフォーマンスなどをおこなう。2002年よりサウンドアートプロジェクト「The SINE WAVE ORCHESTRA」を主宰。高谷史郎、坂本龍一、Dumb Typeを始め、様々な作家の舞台、インストールの制作に参加。

信者2(音響オペレーター)

**ウエヤマトモコ**

Tomoko Ueyama

音響作家。音と人・ミミ鳥代表。聴覚と触覚によって世界を認識することをテーマに、サウンドインストールや映画音響、フィールドレコーディング、ワークショップ制作を行う。近年の主な作品に『私ちゃん』(2000/Ars Electronica Honorary Mention)、『3 PORTRAITS & JUNE NIGHT』(2014/音響担当/監督:池田泰教)などがある。

信者3(ミキシングオペレーター)

**大石桂誉**

Yoshitaka Oishi

静岡出身。中学高校とCGやプログラミング、電気回路といったコンピュータに関する知識、技術を習得。大学ではカール・ストーンに作曲を師事。ネットワークと音に関する表現を模索しながらイベント会場の音響設計や技術協力などを行う。汗かくメディア2016(メディアサイト研究会)や自分で作るMaxパッチ Device 30、Max for LiveのTipsなどをWebで公開(leico名義)。

# 新しい時代

作曲脚本・音楽監督

**三輪眞弘**

演出・映像

**前田眞二郎**

**モノローグ・オペラ**

*The Monologue Opera  
The New Era*

出演

14歳の少年信者 | さかいいいしう

儀式を司る4人の巫女(キーボード) | 岩野ちあき、木下瑞、

日笠弓、盛岡佳子(大阪大学『記憶の劇場』プロジェクト受講生有志)

信者1(映像オペレーター) | 古舘健

信者2(音響オペレーター) | ウエヤマトモコ

信者3(ミキシングオペレーター) | 大石桂誉

スタッフ

作曲・脚本・音楽監督 | 三輪眞弘

演出・映像 | 前田眞二郎

メディアオーサリング | 古舘健

グラフィック | 岡本彰生

フォルマント音声合成 | 佐近田展康

音響 | ウエヤマトモコ

照明 | 畔上康治\*

衣裳・ヘアメイク | 岩井亜希子

舞台監督 | 山口弘晃\*

テクニカルコーディネーター(舞台) | 世古口善徳\*

テクニカルサポート | 大石桂誉

技術協力 | 松本祐一、赤羽亨

広報デザイン | 岡澤理奈

制作・演出助手 | 福永綾子(ナヤ・コレクティブ)

企画提案 | 伊東信宏

プロデュース・制作 | 藤井明子\*

宮地泰史(あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール)

制作 | 上林元子\*

(※・愛知県芸術劇場)

2017年12月8日|金| 19:00開演 18:30開場

12月9日|土| 14:00開演 13:30開場

# 愛知県芸術劇場 小ホール

主催：愛知県芸術劇場

協力：情報科学芸術大学院大学[IAMAS]、大阪大学『記憶の劇場II』プロジェクト

助成：平成29年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

共同企画：あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール

22世紀クラブ委嘱作品(2000年)



## ごあいさつ

本日はご来場いただきまして誠にありがとうございます。

作曲家の三輪眞弘氏、映像作家の前田真二郎氏は、東海地域を拠点に国内外で精力的に活動され、これまでも愛知芸術文化センター・愛知県芸術劇場で作品の発表を行っているアーティストです。モノログ・オペラ『新しい時代』は、お二人のコラボレーションの初期に生まれた、両アーティストからみても重要と思われる作品で、その再演を、愛知県芸術劇場小ホール「ミニセレ（ミニシアター・セレクション）」シリーズの1演目として上演できることを大変うれしく思います。

公演は“「新しい時代」教”の儀式という設定で行われます。皆様も参列する信徒の一人としてこの儀式に立ち会うという形で上演をお楽しみください。終演後、帰途につき、現実の社会、または皆様の日常に照らした時に、他では得難いメッセージを感じ取っていただければと思います。

最後になりましたが、本公演の実現にご協力賜りましたすべての方々にご心よりお礼申し上げます。

愛知県芸術劇場 館長 丹羽康雄

## Message

テクノロジーと实在／声をめぐるこのオペラの音楽については17年前から変更はない。しかし今回、初演時には技術的に不可能だった大きな夢が叶えられた。つまり、主人公の歌声の「キャプチャー」や、その声が「神の旋律」に取り込まれていく物語の過程を生声のサンプリング（録音）ではなく、すべて人工的に合成した音響（声）によって実現したのである。フォルマント兄弟の弟、佐近田展康なくしてはあり得なかった今回の再演は、そのような意味できわめて高度なデジタル技術を駆使した、ライブ・パフォーマンス（歌唱）と映像を伴う「コンピュータ音楽」となった。それは、刺激的な音響で人を圧倒したり驚かせたりするようなものではないとしても、「機械」が今、ここまで人間に「近づいて」きたことを密かに暗示してくれるだろう。

作曲・脚本・音楽監督 三輪眞弘

テクノロジーと实在／声をめぐるこのオペラの映像については17年前から変更はない。しかし今回、初演時での機材を発掘して映像演出を再現することはせず、この時代の標準的な機材でシステムを組むことにした。もし、初演と同じ機材でスクリーンに映像投影したら、企図に反して古びた印象になったはずだ。この17年に渡ってデジタル技術は飛躍的に発展した。映像分野だけでなく、日常生活にインターネット環境が浸透したことが大きい。次々と新たな製品やサービスが登場する中、今年、元Googleのエンジニアが、神は人工知能（AI）と標榜する宗教団体を設立したそうだ。本作は、狂信する少年の悲劇であると同時に、それへの問いかけであり、我々の内にある「テクノロジーに対する信仰」について、思いを巡らせる契機となるだろう。

演出・映像 前田真二郎

## 解説:『新しい時代』の再演に

三輪眞弘（脚本、作曲）と前田真二郎（演出、映像）による『新しい時代』は、「22世紀クラブ」の委嘱によって書かれ、2000年4月に京都（アルティ）と東京（紀尾井ホール）で上演された。「オペラ」を書いて欲しいという委嘱に、三輪さんは戸惑ったのではないかと思う。19世紀の作曲家のように、登場人物が歌いながら愛し合い、歌いながら死んでゆくような劇音楽を平気な顔をして書くには、三輪さんは繊細すぎ、知的すぎた。そもそも「歌」などというものを作ることもできなかった、と三輪さんは書いている。「憧れ」が破壊し尽くされた後、「歌はうそ臭くわざとらしい様相を免れない」というのだ。

三輪さんは、1996年に、約18年におよぶドイツ滞在から帰ってきたばかりだった。日本に帰って、三輪さんは、その音楽の状況、社会の状況にほとんど絶望したのだと思う。音楽の世界では、続々と「衝撃的新作」が発表され、そして何事もなかったかのように消費されてゆく。当該の新作のまわりを、これが革命的に斬新であり、社会の変動を見事に写し取っていて、音楽界に後戻りできない衝撃を与える、と語る言葉が取り巻いているだろう。だが、実際にはそんなことはまず起こらない。言葉はなめらかに紡ぎ出され、なめらかに聞き流されて、なめらかに忘れ去られていく。

そんな中で帰国後初めて書かれた作品「言葉の影、アレルヤ」（1998年）は、一つの灯籠とそれを取り巻く4人のキーボード奏者のための音楽である。灯籠には楽譜が映し出され、その指示に従って4人の奏者が単純な旋律を紡いでゆく。すると、或る一瞬、4つの音が組み合わさって、「言葉」が浮かび上がる。それは行き交う言葉に絶望し、歌を書けなかった三輪さんに代わって立ち上がった何者かが発したギリギリの声のようだ。この作品はオペラの冒頭にそのまま取り込まれ、音楽的な基層を成すことになる。

一方で、現実世界の、特に三輪さんが18年ぶりに体感したはずの日本では、それまでには考えられなかったような事件が次々と起こっていた。三輪さんが帰国する1年前である1995年は、地下鉄サリン事件と阪神・淡路大震災の年であり、そして1年後の1997年には神戸連続児童殺傷事件が起こっている。

このオペラの主人公は、14歳の少年である。ストーリーは、この少年がネット上に漂う情報の中から「新しい時代」の神のメッセージを聞き取って、ネットワークの中に自分という存在の情報を解放し、そして余剰になった自分の物理的存在を「消去する」（つまり自死する）というものだ。この物語が、上記の幾つかの事件を濃厚に反映していることは明らかだろう。

三輪さんが全部自分で書いたという少年の手記の言葉は、その切実さも、子供っぽさも、純粹さも、そして自己顕示的なあざとさも全て含めて、あまりにリアルだった。そのリアルさを、今の若者が実感するのは、難しいかもしれない。だが、このオペラの中で三輪さんと前田さんが示した直観は、今や加速度的に重要性を増してきているように思われる。

ここで扱われているのは、機械（コンピュータ）が人間のように歌ったり言葉を発したりすること（つまり機械の人間化）、そしてそれと呼応するように人間が機械のようにデータ化され、振る舞うこと（つまり人間の機械化）、という逆方向だが相似的な現象の、妖しさと危うさだった。三輪さんのその後の活動も、まさにこの方向に向かってより先鋭的になってゆく。「フォルマント兄弟」（2000年結成、三輪眞弘と佐近田展康とのユニット）の試みは、機械に言葉を語らせ、歌わせることをめぐるものだった。一方で、「逆シミュレーション音楽」と名付けられた一連の作品（2002年の「またりさま」がその原型である）は、人間にコンピュータの一素子として振る舞うことを要求するものである。

考えてみれば、実社会の方も、この人間と機械の間の危うさに向けて傾斜を深めているようだ。ヴォーカロイドに夢中になる若者たち（機械の人間化）、Perfumeのケロケロ声（人間の機械化）。電車や授業中にふと周りを見渡すと皆、スマホを覗き込んでいる。そしてスマホの中の自己像の方が、実世界の自分の姿よりずっと大切で切実だ、と思う人々はどんどん増えているようだ。世界は、誰かのコンピュータの中のシミュレーションなのだ、という話が真剣に議論されている（「シミュレーション仮説」）。みんな、もう「新しい時代」を生きている。

17年前の三輪さんと前田さんの直観に、もう一度じっくり向き合わねばならない。 企画提案 伊東信宏